

『畸人十篇』の研究：第一篇・第二篇訳注

柴田，篤

九州大学大学院人文科学研究院哲学部門：教授：中国哲学史

<https://doi.org/10.15017/13919>

出版情報：哲學年報. 68, pp.157-173, 2009-03-01. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン：
権利関係：

『畸人十篇』の研究

第一篇・第二篇訳注

柴 田 篤

はじめに

『畸人十篇』は、明末に来華したイタリア人イエズス会士マテオ・リッチ（中国名は利瑪竇、号は西泰、一五五二～一六一〇）が、中国文で著した書物である。上下二巻、全十篇から成る。リッチが実際に中国人士大夫と行った対話を基にしたもので、カトリック・キリスト教（天主教）や西洋思想に関するリッチの発言内容と、それに対する中国人の反応とを伝えた貴重な文献と言える。明末の万曆三十六年（一六〇八）に初刻され、先に刊行された『天主実義』（一六〇三年初刻）と共に、中国のみならず日本・朝鮮など東アジア地域の社会や文化に大きな影響を与えることになる。⁽¹⁾ 各篇の標題は、以下のように四字二句からなっている。

【第一篇】「人寿既過、誤猶為有」（人は寿命が過ぎてしまっているのに、まだあると誤解している）

【第二篇】「人於今世、惟僑寓耳」（この世は人にとっては仮の宿りに過ぎない）

【第三篇】「常念死候、利行為祥」（常に死の時のことを考え、よく生きることが幸いなことである）

【第四篇】「常念死候、備死後審」（常に死の時のことを考え、死後の審判のために準備をする）

【第五篇】「君子希言、而欲無言」(君子はめつたに話さず、何も語るまいと思う)

【第六篇】「齋素正旨、非由戒殺」(齋戒の正しい目的は、殺生を戒めるためではない)

【第七篇】「自省自責、無為無尤」(自己を反省し問責すれば、作為もなく咎とがもない)

【第八篇】「善惡之報、在身之後」(善惡の行いの報いは、死後にもたらされる)

【第九篇】「妄詢未來、自速身凶」(むやみに未來を問うことは、我が身の不幸を早めることである)

【第十篇】「富而貪吝、苦於貪竄」(富んで貪るのは、貧しいことよりも悲惨である)

筆者は先に『畸人十篇』の成立事情とその内容や版本など、基本的問題について考察を行った⁽²⁾。現在のところ、本書全体の現代語訳はまだ作られていないので、本稿では、第一篇・第二篇の訳注を行うことにする⁽³⁾。

第一篇の対話者は、文中には「李太宰」と見えるが、李戴(生卒年未詳)のことである。字は仁夫、河南省延津の出身である。隆慶二年(一五六八)の進士。万曆二年(一五九八)に吏部尚書となり、同三年(一六〇三)に致仕している。本文中に「私はその時ちょうど五十歳になろうとしていた」というリッチの発言が見られることから、リッチが満五十歳になる一六〇二年十月十日の少し前の対話と考えられる。リッチの「報告書」⁽⁴⁾第四の書・第14章には、「彼(李戴)も神父(リッチ)と親しく言葉を交わしたいと望んで、何度か神父を自宅に呼び、来世の問題について語り合った。その老人の心はそうした問題の方に傾いていた。だが、職務ゆえに何事につけても時間のゆとりがなかった」と見える。

第二篇の対話者は、文中には「馮大宗伯」と見えるが、馮琦(一五五八～一六〇三)のことである。字は用韞、山東省臨朐の出身である。万曆五年(一五七七)の進士。万曆十九年(一六〇一)に礼部尚書となり、同三年(一六〇三)三月に卒している。本文末尾に、会談後しばらくして馮琦が逝去したと記されていることから、万曆三〇年(一六〇二)頃の対話と考えられる。リッチの「報告書」(同前)には、「とりわけシャンシュ(尚書)のフン(馮)から

はさまざまな援助を受けた。彼はすぐれた文人であり、しかもたいへん親切だったから、王都でもあらゆる人びとから愛されていた」とある。

第一篇は、歳を取ることを「歳が無くなる」と表現したリッチの発言に驚いた李戴に対して、リッチが、時は過ぎ去るものであり、心や徳を養うこと（道徳）のために時間を大切に使うべきである、と論じている。

第二篇は、先ず馮琦が、人生はいかに苦勞に満ちているかということを列挙して、このような苦難の人生を与えている天主は人を禽獸ほど愛していないのではないか、と問い質している。リッチはこれに答える形で、今の世は人にとつては仮の世で、本来の住みかは後の世にある、ということ論じている。この部分は、『天主実義』第三篇「人の魂は不滅であり、鳥獸とは全く異なるということ論じる」の冒頭部分に相当し、本論である靈魂不滅の説明の導入をなしている。また、リッチの説明の最後の部分は、『天主実義』第五篇「輪廻六道や戒殺生といった誤謬の説を論駁して、齋戒の正しい目的を示す」の西士の発言16に見られる。いずれも文章に若干の異同が見られるが、後藤基巳氏が指摘しているように、明らかに馮琦との問答内容を、当事者である馮琦が亡くなった直後に、刊行直前の『天主実義』に挿入したと考えられる。『畸人十篇』を編集するに当たっては、もとの対話を記録したものと思われる。リッチの「報告書」（同前）には、李戴や馮琦との問答内容を、数年後に『畸人十篇』の二章に仕立てて刊行したが、「そのおかげでその本及びその二章で扱った事柄は、大きな信頼を獲得することになった」と記されている。

【注】

- (1) 『天主実義』については、拙訳『天主実義』（『東洋文庫』七二八、平凡社、二〇〇四）を参照。
- (2) 拙稿『畸人十篇 研究序説』（『哲学年報』第六十五輯、九州大学、二〇〇六）を参照。
- (3) 栗田英二氏は、『畸人十篇』全十篇のうち、第一篇から第八篇の途中までの訓読文を公にしている。『畸人十篇』の訓読 平田篤胤とキリスト教との関係を理解するために、「西日本宗教学雑誌」第8号、一九八六）、『畸人十篇』の訓読（2） 平田篤胤

胤とキリスト教との関係を理解するために、「西日本宗教学雑誌」第9号、一九八七）、『崎人十篇』の訓読（3）平田篤胤とキリスト教との関係を理解するために、「西日本宗教学雑誌」第10号、一九八八）。いずれも、原漢文に句読点、返り点を施し、送りがなやふりがなを振り、語注を附したものである。また、韓国語訳としては、『崎人十篇』東洋人のためのキリスト教の紹介』（全州大学校出版部、一九九七）がある。なお、以下の訳注では、近年中国で出版された校点本『利瑪竇中文著訳集』（朱維鈺主編、復旦大学出版社、二〇〇一）所収の『崎人十篇』も参照したが、同本は道光二十七年（一八四七）重刻本を底本としており、明末版とは文字に重大な変更があることから、注意を要することを明記しておく（拙稿『崎人十篇』研究序説』を参照）。

(4) マテオ・リッチの「報告書」の原題は、Mateo Ricci, Della entrata della compagnia di Gesu e christianità nella Cina（「イエズス会によるキリスト教のチーナ布教について」）で、川名公平氏訳『中国キリスト教布教史 一・二』（岩波書店）大航海時代叢書』第Ⅱ期 第8・9巻所収、一九八二・一九八三）による。

(5) 後藤基巳『天主実義』（中国古典新書）、明德出版社、一九七二）の解説（二一～二三頁）を参照。

【凡例】

- 一、本稿は、明の利瑪竇（マテオ・リッチ）著『崎人十篇』上下二巻（一六〇八年初刻）の現代語訳である。
- 一、底本としては、明の李之藻が編纂した『天学初函』（一六二九年刊）理編所収本（燕貽堂較梓版）を用いた。
- 一、底本の文字の誤りについては、諸版本を参考にして、これを改めた。但し、後世の改竄本との異同については触れていない。
- 一、本文には改行がないが、文章が長いところは、読みやすいように適宜改行を施した。
- 一、訳文はできるだけ平易な現代語表記を心掛けた。「」内は原文にない語句を補ったところを、（ ）内は語句の簡単な説明を施したところを、それぞれ示した。
- 一、訳文中、キリスト教で説く「神」については、「天主」という訳語で統一した。但し、原文に「天主」とないものについては、（ ）内に原文を表記した。
- 一、利瑪竇の独特の用語や用法などは、注で原文を示した。
- 一、注に引用する『旧約聖書』と『新約聖書』の語は、『聖書 新共同訳』（日本聖書協会発行、一九八七）に依った。ただし、本文中の表記については、『崎人十篇』の原文を忠実に現代語訳した。

現代語訳『畸人十篇』上巻

第一篇「人は寿命が過ぎてしまっているのに、まだあると誤解している」

吏部尚書りぶしょうしよである李戴りたいたいが私の年齢を尋ねた。私はその時ちょうど五十歳になるうとしていたので、「もう五十歳が無くなりました」と答えて言った。「すると」「李」吏部尚書は、「えっ、あなた方の教えでは有るものを無いと言つのですか」と言った。私は、「そうではありません。年齢というものは、過ぎ去るものです。それが今どこにあるのか、私には分かりません。ですから、『今「五十歳が」有ります』とは取えて言わないだけです」と言った。「李」吏部尚書は納得しなかつた。「そこで」私は、続けて言った、「ここにある人がいて、五十石の粟あわを所有し、五十鎰いっぴの金を手に入れたとします。⁽¹⁾これを蔵や袋の中うちにしまっておけば、「いる時に」取り出して使うことができ、思い通りに使えます。こういう場合でこそ『有る』と言つのです。蔵や袋が空からになるまで使って、それでも『有る』と言えるでしょうが。そもそも一年は一月が、一月は一日が積み重なってできています。私が生まれて一日が経たち、太陽が大地に没すれば、一年と一月と我が寿命は、一日分すっかり無くなってしまうのです。月が十二月になり、季節が冬になつてもやはり同じことです。このように、一日が無くなり、一年が無くなると、身体は日々に成長しますが、生命は日々に消えて行くのです。年齢が過ぎ去ってしまうならば、『有る』と言つのが間違つているでしょうか、それとも『無い』と言つのが間違つていないでしょうか」と。「李」吏部尚書は私の最初の答えの意味を悟り、たいそう喜んで、「そうか、年齢が過ぎ去つた以上、それが『有る』と言つことは本当にできないのですね」と言った。

私は更に言った、「もしある人が、何鎰かの金や何石かの粟を手に入れて、これを使って織物や器具に換え、自分を養い、老人や幼児を養い育てるならば」「金や粟は」無くなることは無くなるのですが、それでも「形を変えてそ

れは「『有る』と言つことができます。もし賭博^{とばず}でこれを浪費したり、谷底に棄てたり、あげるべきでない人にあげたりすれば、これは『本当に無くなつた（無くした）』といつことになります。残念なことに、私は過ぎ去つた歳月の間、治国の事績もなく、家政の営みもせず、我が身を修めることもなく、これらの歳月を使ったのは無駄^{むだ}に使つただけのことですから、それが今無いというのは、本当に無いということなのです。「それなのに」まだ有りますなどと偽^{いつはり}つて言つことができましようか」と。

「李」吏部尚書は言つた、「ああ、貴方は何と謙虚な言い方をなさるのでしようか。無駄に歳月を過ごしたただけ、なすべきことをなさなかつたのだから、それまでの生命は無かつた「も同然」と言われる。世間には愚か者がいます。若い時から年老いるまで、天を軽んじ、人を傷つけ、己を汚すばかりです。「それでも」天は慈愛深く、更にその者に寿命を与え、その行いを改めるように期待しますが、彼はかえつてその寿命を使って過ちを増し加え、死の時に至つては、年齢の分だけ悪を積み重ねてしまつています。何と危ういことでしょうか。貴方はその寿命が有ると言われますが、無いと言われますか」と。私は言つた、「生まれなかつた方がましでしょう」と。

しばらくして、「李」吏部尚書は住まいの方に席を移して、身内の者たちに先程の私との問答を語つて聞かせた上と言つた、「そもそも西洋の学校で教える眞実の学問は、実践に裨益するところ大なるものがある。お前たちもこれを究めて忘れないようにしなさい」と。

ああ、時の本質は永遠に流れて止まることがない。⁽³⁾過ぎ去つた年はもはや存在しない。⁽⁴⁾ましてや、まだ来ていない時は言つてもない。だから私は「日^ひ計^{けい}箴^{しん}」(時の戒め)を作り、このように記した。「過ぎ去つた時は、去つてしまつて追いかけることはできない。やつて来る時は、まだ来ていないので迎えることはできない。時は何処^{いずこ}に有るのか。わずかな隙間^{すきま}をあつといつ間に白馬が通り過ぎるよつな今」といつ瞬間⁽⁵⁾だけが、修め用いることができる。もしわずかな時を用いることが無駄だといつならば、一体いつになったら有益な時が来るだろうか。すべて物は失われても、

努力して追いかけて取り戻すことはできるし、懸命に加えて補うことはできるが、時だけはそうはいかない。今日という日がひとたび去れば、新しい日が次々にやって来て、今日という日は益々遠ざかってゆく。どうして取り戻すことができようか。新しい日には、せいぜいその日のことができるだけだ。どうして「既に過ぎ去った」今日を補うゆとりなどあるうか。春が来てしまえば、農夫は失った冬の時を取り戻すことはできない。老年が来てしまえば、人は失った少年の時を取り戻すことはできない。だから、浪費すべき時などないのだ。そもそも自分が所有して使用できるもので、自分の年（寿命）に勝るものはない。年は、私と共に生まれ、私と共に死ぬ。他人が奪うことなどできない。どんな時でも私に従い、どこにいても私の側にいる。智者は時を知っており、時が貴い宝物だと知っている。一日でも一晩でも無駄に棄てることは許されないのだ」と。

昔、我が国に一人の学者がいた。いつも天主に対して静かに思いを潜め、物事を行う際には、天主の御旨を仰いでそれにならうように努力したが、俗事から逃れることはできなかつた。ある日、緊急の出来事が起き、一晩、茫然として「天主のことを」忘れて思わなかつた。しばらくして深く覺つて、直ちに悔い嘆いて言った、「ああ、一晩中、天主のことを思わなかつた。まるで鳥獣のようだ」と。この学者は、一晩、天主のことを思わなかつただけで、鳥獣になつたと自らを叱咤した。もし一日中、この「天主への」思いがなく、一年中、この「天主の」ことを忘れるならば、草木や土石になつてしまつたと自らを罵らないことがあるうか。

立派な人物は、ほんのわずかな時間をも尊び、いつも一日が短いと感じている。愚かな人物は、「時間を」氣にも留めず、ひたすら遊び戯れて一日を過ごす。自分には十分な時間がないのに、それでもやることを減らして日を過ごすとしてゐる。遊び戯れる暇があるだろうか。真剣に道「を明らかにすること」に励む者は、自分を旅人のように見なす。貴重な貨幣を懐に入れて、荒野を行くうち、にわかにならぬ日暮れて真つ暗になり、道も分からなくなる。安心して泊まれる所が遠くにあるのか近くにあるのかも分からない。こんな時、安心して行くことができるだろうか。

心を戒め慎まないでよいだろうか。

そもそも一日「一日」は、もともと不幸でもなければ、空虚でもない。およそ一日があるのに、少しでも用いて自らの過ちを少なくもせず、少しでも用いて自らの徳を増やしもしなければ、この日は不幸な一日、空虚な一日と言ふべきである。普通の人が財産を作ると、急用があつても常に財産を惜しむ。君子は正しいことに一日を用い、常に一日を大切にする。ああ、世間の人は、誰が一体時を重視しようか。誰が一日を軽んじてたやすく投げ捨てないことがあるか。それでは、一日功夫を行つても、善を尽くすことがなかつたり、過ちを犯さないことを免れたりすることができようか。何と浅はかなことであろうか。蜘蛛くもという虫は、生涯織物上手で、網を張つて蚊かや蠅はえを捕まえるが、しばしば風に壊されてしまふ。人が生涯さま末まなことに努力してしかも完成できないことも、「これと」何の違いがあるか。

そもそも世の中の様々な事物は、退けてしまふこともできないが、留めておくこともできない。だから、賢い者はそれらに対して「自分の」心を貸すが、愚かな者は「自分の」心を与えてしまふ。貸す者はしばらく預けるだけ「でまた取り戻すことができるの」だが、与える者は自分のものでなく「なり二度と取り戻すことができなく」なつてしまふ。ああ、世間の人は何と大きな過ちを犯しているのだろうか。朝から晩まで俗事にせき立てられて、道徳や、心を慎み、行いを修めることなどに話が及ぶと、直ちに「とても良いことだ、とても大切なことだ。ただ私には暇がないだけだ」と言う。良くもなく、大切でもないことをするのは時間があるのに、良いことや大切なことを行うとなると、途端に「暇がない」と言うのは、何と狂つたことではないか。人はたとえどんな緊急なことがあつても、毎日二度三度の食事を取る余裕がないことはなく、「暇がない」などと言つたりは決してしない。体を養つためにはわすかでも暇を作り、このように努力するのに、心を養つためには「暇を作ることが」できないのである。心や徳を養つために、わずかな暇を作る余裕もないということは、この上なく恥ずかしいことである。ましてや、求めて得ら

れない場合には言つてもない。何と痛ましいことが。

【注】

- (1) 一石(原文は斛^{はく})は十斗。一鎰は二十兩。
- (2) 原文には、「侮天耳、害人耳」とある。『論語』憲問篇に、「子曰く、天を怨みず、人を尤^よめず、下学して上達す」と見える。
- (3) 『莊子』秋水篇に、「時は止まること無し」とある。また、『呂氏春秋』首時篇に、「時は久しくは留まらず」とある。
- (4) 『國語』越語下に、「時は再びは来らず」とある。
- (5) 原文には、「惟目下過隙白駒」とある。『莊子』知北遊篇に、「人の天地の間に生くるは、白駒^{はくこ}の卻^{ゆき}を過ぐるが若く、忽然^{ごうぜん}たるのみ」と見える。
- (6) 原文には、「智者知日也」とある。『呂氏春秋』當務篇に、「時を知るは智なり」と、『孔子家語』屈節解篇に、「智者は時を失わざ」と見える。

第二篇「この世は人にとっては仮の宿りに過ぎない」

礼部^{れいぶ}尚書^{じやうしよ}である馮琦^{ふうき}が私に尋ねて言った、「天地の間の万物の中では人間だけが最も高貴な存在であつて、鳥獸なご及びもつかないように思われます。ですから、「人は天地と並び立つ」と言つのです。しかし、また鳥獸を觀察してみますと、その様子は人間よりかえつて快適で自由であるようです。なぜならば、「鳥獸は」生まれたとたんに嬉嬉^{きき}として自分の力で行動し、「自分を」育ててくれるものに従い、傷つけるものからは身を避けます。「鳥獸は」毛や羽、爪や甲羅を身にまとして「いるだけで」、衣服や履物も持たず、種^うえることも採^とり入れることもせず、貯^{たくわ}える倉庫も炊^たいたり供えたりする器具も持たないのに、食べるままに成長することができ、思ひのままに休息することができ、天地の間に楽しんで、常に余裕があります。そこには、「人間のように」他者と自己、貧窮と富裕、尊貴と卑賤との

区別もなければ、なすべきかどうかとか、何を先にすべきかとか、どうしたら功名を得られるかとか、そうした思いに心を縛られることもありません。楽しみ求めて、日々思いのままに行うだけです。⁽³⁾

「それに比べて」人が生まれるとき、母親は先に腹を痛め苦しみ、胎を出た赤ん坊は口を開けたとたんに泣き声を発します。まるでこの世に生まれた災難をすでに自分で知っているかのようです。生まれた当初は「体も」弱く、歩いて動くこともできず、三歳になってやっと抱かれなくてもよくなります。⁽⁴⁾ 壮年になると、それぞれに労働があり、苦勞をしないわけにはいきません。農夫は春夏秋冬いつでも田畑を耕し、商人は幾年も山河を経めぐり、職人は四六時中、手足を働かせ、士大夫は昼も夜も精神をすりへらします。いわゆる「君子は心を勞し、小人は力を勞す」とある通りです。五十年の人生には五十の苦しみがあります。一人の体の病氣となると、「その数は」百どころではありません。医術書を見ると、目の病氣一つを取っても三百いくつもの種類があります。まして体全体の病氣となると、とても数えきれぬものではありません。そうした病氣を治す薬も、たいていは口に苦いものです。⁽⁶⁾ この世の中でも、大小にかかわらず虫や動物は毒具を使って人を傷つけます。あたかも人が神明に誓うために生鬘を殺して血をすするようになります。⁽⁷⁾ 一寸に満たない虫でも七尺の体「の人間」を殺すことができます。

人間同士でも互いに傷つけることがあります。凶器を作つて人の手足や肢体を切断します。尋常でない死に方は、たいていは人が殺したものです。さらに今の人は昔の武器は役に立たないとして、さらに新たなものを製造し、益々強烈なものに変わります。ひどい場合は野でも町でもどこでも殺戮が繰り広げられることになります。かりに平和な世の中であつても、何も欠けることのない家族があるでしょうか。財産があつても子孫がないとか、子孫があつても才能がないとか、才能があつても安樂がないとか、安樂があつても権力がないとかいうことがあると、不完全で恥ずべきだと「愚痴を」こぼします。大きな喜びや楽しみを持ちながら、小さな不幸におしつぶされるといふことがしばしばです。生涯憂いばかりで、ついに大きな憂いに塞がれて死んでいくことになります。体は土の中に埋められても、

「苦しみから」逃れることができません。ですから、昔のある賢人は我が子を戒めて、「おまえは自分を欺あざむいてはならない。良心をくرامしてはならない。人が競いあつて行き着くところは墓場にすぎない。我々は生きているのではなく、常に死んでいるのだ。生まれてきたとたんに死ぬことが始まる。死ぬと言っているのはそれが完全に終わってしまうことだ。月の一日が過ぎれば、一日が少なくなったことで、一步墓場に近づいたことになる」と言っています。「このように我々は」避けることのできない患うれいを畏れるばかりで、いつ安心することができましようか。これは、でも、外面の苦しみを訴えているだけで、内面の苦しみは、誰が言いあてることができましよう。

すべてこの世の辛苦は本物の辛苦ですが、快樂は偽物の快樂にせものです。苦勞は日常のことですが、快樂はほんの数える程度です。一日の憂いは十年訴えてもきりがありませんから、一生の憂いことは一生かけても語りつくせるものではありません。この世にあつて人の心は、愛・悪にくしみ・忿いかりり・懼おそれの四つの感情に悩まされます。ちょうど高い山にある木が四方からの風に吹きさらされるように、片時も「心の」静まることはありません。「また」酒色に溺れたり、功名に惑わされたり、財貨に迷つたりして、各自が自分の欲に引きずりまわされています。「ですから、ありのままの」自分自身に満足してそれ以外に求めない者などどこにもいません。広い天下や多くの人民を与えたところで決して満足しないのです。愚かなことです。

そのようなことから、人は自らの「踏み行つべき」道でさえ悟っていないのです。ましてそれ以外の道においては言うまでもないことです。それなのに孔子を学んだり、老子の教えに従つたり、仏教を信じたりと、世間の人々の心は三つの道（教え）に分断されてきました。また好奇心の強い者は新説を立てて別に学派を創りましたので、そのうちに「儒・仏・道の」三教は分かれて三千もの教えになつてしまつて、それでもまだ止むことがありません。自分では「正道だ、正道だ」と言いますが、世の中の道は日々ますます乱れていきます。上の者は下の者を軽んじ、下の者は上の者を侮あなづります。父親は横暴で、子どもは反抗し、君主と臣下は互いに憎みあい、兄弟は互いに傷つけあい、

夫婦は互いにそむきあい、朋友は互いにあざむきあいます。世の中は、あざむきとへつらい、でたらめといつわりに満ちて、本来の心を回復することがありません。ああ世間の人々は、本当にあたかも大海原で風や浪に遇つて、船舶が壊れて沈み、波間に漂い、浮き沈みしている人々のようです。誰もが自分の危難に気がはやり、他人のことには気がまわらず、折れた板ぎれにしがみついたり、壊れた漂流物に這い上がつたり、箱や籠をつかんだり、手当たりしいあわてて握つて放しません。「結局は」あいついで死んでいきます。何とも残念なことです。一体なぜ天主は人間をこのような苦難の世界に生まれさせるのでしょうか。鳥獣ほども人間を愛してはいないのではないのでしょうか」と。

私が答えて言った、「おっしゃる通り」世の中にこのような苦難があるにもかかわらず、我々は愚かにも執着して「この世のことを」断ち切ることができません。心が安らぐにはどうしたらよいのでしょうか。この世の苦渋に満ちたありさまはこんなにもひどいのに、世間の人々は愚かにもこの世で大事業を行つたり、田地を開墾したり、名声を求めたり、長寿を願つたり、子孫のことを慮つたりして、篡奪、弑逆、攻撃、併呑と、どんなことでもします。何と危ういことでしょうか。

昔、西方の国に二人の有名な賢人がいました。一人はヘラクレイトスと言い、もう一人はデモクリトスと言いました。ヘラクレイトスはいつでも笑い、デモクリトスはいつでも泣いていました。二人とも世間の人々が空虚なものを追求しているのを見て、一方は笑つては謗り、他方は泣いては憐れんでいたのです。また、ある国の近世の習俗のことを聞きました。今も残っているかどうかは分かりませんが、子どもが生まれると、友人たちがその門口に立って泣いて申います。それは、その子が苦勞多い世の中に生まれてきたからです。「また」亡くなった人があると、その門口に立って喜んで祝います。その人が苦勞多い世の中を去つたからです。これもやはり生を凶（不幸）とみなし、死を吉（幸福）とみなすことです。これらはいずれも非常に極端なことです。しかし、この世の実情を達観した者と言つことができず。

現世は人の「住むべき」世界ではありません。鳥獣にとつては本来の住みかなのです。ですから、「鳥獣は」現世で悠然として満足しているのです。人にとつて、現世はしばらくの仮住まいにすぎないのです。ですから、「人は」この世で安心することも満足することもできないのです。どうか儒教で警えさせてください。今、科挙試験に警えてみると、この日、士人は苦勞をして、従僕は氣樂であるかのようです。「しかし、はたして」役人（試験官）は従僕に対して温厚で士人に対して冷淡なのでしょう。まぎれもなく、一日も経たないうちに、その人の品級（身分）が決まってしまうのです。試験が終われば品級の高下はおのずとはつきりします。私が思いますに、天主は人を現世に生かして、その心を試して、その徳行の高下を判断しておられるのでしよう。ですから、現世は我々の仮住まいであつて、永遠の住まいではありません。我々の本当の住まいは現世にはなく来世にあり、人「の中」にはなく天「主の中」にあるのです。そこに至つてこそ本来の事業を始めるべきなのです。現世は鳥獣の世です。ですから、各種の鳥獣の体は「頭が」地を向いています。人は「天の民」ですから、「体は」頭を上げて天を向いています。現世を本来の住みかとする者は、鳥獣の仲間にならうとする者です。「ですから、そのような連中が」天主は人間に対して冷酷だとみなすのは、もとより怪しむに足りないことなのです。天主が人を憐れむのは、人の心がひたすら地上の物に向けられ、そこを故郷だと考え、現世の些細なことにのみ捉われて、天の故郷やより高い来世のことを悟り望み見ることを知らないからであり、それで害毒「をもたらずもの」をこの世界に沢山置いて、人を救い出そうと思つておられるのです。

そもそも天主はこの世界を創造された時、世界中の万物を我々の役に立つために養生したり利用したりするようにして、人が決して辛苦することがないようにされたのです。「ところが」我々の最初の祖先が天主（上帝）に逆らい、後の子孫もこれに倣つたために、初めて万物も人に逆らうようになり、多くの苦しみが起こつたのですから、この多くの苦しみは天主の当初のお考えではなく、人が自ら招いたものにほかなりません」と。

「馮」礼部尚書は「私の話を」聞き終わると、感嘆して言った、「ああ、この「天主の」教えが中国で明らかにされることによって、あらゆる疑問が氷解し、もはや天「主」を咎める考えなどありえませんが、どうして天「主」を咎めることができませんようか。そもそも歴代の聖人や賢人方で、すべて道を行い世を救う者は、その一生の行為は辛苦でないものはありません。もし造物者が道を成就する人に対し、その死後、草木同様に朽ち果てさせて、永遠の平安と響応が得られる樂園を用意することがないというのであれば、彼の人々が「生前」体験した辛苦に対して、造物者は何ら報いることがないということになり、世の中の人々が疑惑を持たないことがありましようか。さらに、御高説で述べておられることは人々を真の徳に引き上げるものであり、人欲を阻み軽薄なものに従うことなく、心を堅固にして辛苦を耐え忍び、窮地にあつても乱れることなく、志を強くして本分に立ち帰るようになるのは、人類を他の類から区別することであるなどというのは、すべて真実の説であります」と。

この日から「馮」礼部尚書は、天主の正しい教えに強く志し、しばしば私に聖なる教えの教理や戒律を翻訳するよう求め、それ以外のものも速やかに翻訳するよう促した。また、しばしば上奏を行い、空疎な「仏教の」教えを排撃し、天主(上帝)に仕える学問を中国の多くの学校で復興するよう願った。「しかし」ああ、何と痛ましいことか。「馮」礼部尚書の偉大な志が成就しようとした矢先に、突然病気にかかり亡くなられた。かくして、私の望みは打ち砕かれてしまった。ああ、今より後、多くの人々の中で、彼の立派な志を継いで成就してくれる者はいるだろうか。いつの日かそうなることを願うばかりだ。

【注】

- (1) 馮琦(一五五八〜一六〇三)、字は用繼、号は琢庵。万曆五年(一五七七)の進士。万曆二十九年(一六〇一)十月に礼部尚書となり、同三一年(一六〇三)三月に在官のまま四十六歳で病没している。『明史』卷二六、『明史』卷二六、『明史』卷二六、『東林列伝』

卷一五に伝がある。文集に『馮用韞先生北海集』四六巻がある。

- (2) 原文には「人參天地」とある。『礼記』礼運篇に、「聖人は天地に參じ、鬼神に並び、以て治政す」と同じく孔子閒居篇に、「三王の徳は、天地に參たり」と、同じく経解篇に、「天子は天地と參たり」とある。また『中庸』第二十二章には、「唯だ天下の至誠のみ能く其の性を尽くすを為す。能く其の性を尽くせば、則ち能く人の性を尽くす。能く人の性を尽くせば、則ち能く物の性を尽くす。能く物の性を尽くせば、則ち以て天地の化育を賛くべし。以て天地の化育を賛くべければ、則ち以て天地と參たるべし」とある。朱子は「天地と參たるとは、天地と並び立ちて三と為るを謂うなり」と注釈している。なお、この「人參天地」という表現は、医書にもしばしば見られる。

- (3) 原文には「日從其所欲爾」とある。『論語』為政篇に、「七十にして心の欲する所に從いて矩を踰えず」とある。

- (4) 『論語』陽貨篇に、「子生まれて三年にして、然る後に父母の懐より免る」とある。

- (5) 『春秋左氏伝』襄公九年に、知武子の言として、「君子は心を勞し、小人は力を勞するは、先王の制なり」と見え、『國語』魯語に、「公父文伯の母の言として、「君子は心を勞し、小人は力を勞するは、先王の訓なり」と見える。また、『孟子』滕文公篇上に、「或いは心を勞し、或いは力を勞す。心を勞する者は人を治め、力を勞する者は人に治めらる。人に治めらるる者は人を食ひ、人を治むる者は人に食むる。天下の通義なり」とある。朱子は、この四句はみな古語であるとしている。

- (6) 『韓非子』外儲説篇左上に、「夫れ良薬は口に苦し」とある。

- (7) 原文には「如相盟詛」とある。『周礼』秋官司盟に、「獄訟の者有れば則ち之れをして盟詛せしむ」とある。犠牲を殺しその血をすすり、神明に告げて盟約を結ぶこと。

- (8) 儒教では上下の關係にある者が互いに礼をもつて親しみあつてことを説く。たとえば、『礼記』経解篇には、「上下、相い親しむ、之れを仁と謂ふ」とある。

- (9) 儒教では父子・君臣・夫婦・兄弟・朋友の五つの人間關係においてあるべきあり方が定められている。儒教倫理の根本である五倫で、父子の「親」(親愛)、君臣の「義」(忠義)、夫婦の「別」(役割)、兄弟の「序」(順序)、朋友の「信」(信義)のことである。『孟子』滕文公篇上に見える。ここでは、それらがすべて破られた状態を言う。

- (10) 原文には「真心」とある。元來仏教語であるが、程子の門人の謝上蔡が「人は須く其の真心を識るべし。儒子の將に井に入らんとするを見る時、是れ真心なり」と説いて以來、程朱学においても天理を本具した「本来の心」を表すものとして用いられる。

- (11) 原文には「黒蠟」、「徳牧」とある。ヘラクレイトス(Heraclitus)は、前五三五頃〜前四七五頃のギリシアの哲学者。万物の根源は火であり、永遠の生滅・変化の中にある(「万物は流転する」と説いた。孤高の生涯を送り、「泣く哲学者」、「暗い人」と称さ

れる。デモクリトス (Demokritos) は前四六〇頃、前三七〇頃のギリシアの哲学者。万物は原子の結合と分離の運動によってあると説いた。「笑つ哲学者」と称される。従つて、「ここに、ヘラクレイトスはいつでも笑い、デモクリトスはいつでも泣いてしました」とあるのは、表現が反対になっていると言える。

(12) 『新約聖書』の「ヘブライ人への手紙」第11章13節に、「自分たちが地上ではよそ者であり、仮住まいの者であることを公に言い表したのです」とある。同じく「フィリピの信徒への手紙」第3章20節に、「しかし、わたしたちの本国は天にあります」とある。また、同じく「コリントの信徒への手紙」第5章1節に、「わたしたちの地上の住みかである幕屋が滅びても、神によって建物か備えられていることを、わたしたちは知っています。人の手で造られたものではない天にある永遠の住みかです」とある。

(13) 原文には「天民」とあり、「天が生じた民」の意味である。たとえば、『孟子』万章篇上に、「予は天民の先覚なる者なり」とある。なお、『聖書』には「神の民」という表現がしばしば見られる。旧約時代においては、神に選ばれたイスラエルの人々という意味であったが、新約時代においては、神(キリスト)の救いに与かるすべての人々を指すようになったと考えられる。たとえば、『新約聖書』の「ヨハネの黙示録」第21章3節に、「見よ、神の幕屋が人の間にあつて、神が人と共に住み、人は神の民となる」とある。

(14) ここまでの文章は、『天主実義』第三篇「人の魂は不滅であり、鳥獣とは全く異なる」ということを論じる「の1、2の文章とほぼ同様の内容である。

(15) これより以下のリッチの発言部分は、『天主実義』第五篇「輪廻六道や戒殺生といった誤謬の説を論駁して、齋戒の正しい目的を示す」の16の文章とほぼ同様の内容であるが、表現はかなり異なっている。

(16) 『旧約聖書』の「創世記」第1章27、30節に次のようにある。「神は御自分にかたどつて人を創造された。神にかたどつて創造された。男と女に創造された。神は彼らを祝福して言われた。「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地上を這う生き物をすべて支配せよ。」神は言われた。「見よ、全地に生える、種を持つ草と種を持つ実をつける木を、すべてあなたたちに与えよう。それがあなたたちの食べ物となる。地の獣、空の鳥、地上を這うものなど、すべて命あるものにはあらゆる青草を食べさせよう。」そのやうになつた。

(17) 『旧約聖書』の「創世記」第3章によれば、神が人に対して食べることを禁じていた園の中央に生えている「善悪の知識の木」の果実を、蛇に誘惑された女が食べ、さらに男も食ふることによつて、人は神の言葉に背く。このことに対して神は、女には「お前は、苦しんで子を産む。お前は男を求め、彼はお前を支配する。」(16節)と言ひ、男には「お前に対して土は次とあざみを生えいでさせる。野の草を食へようとするお前に。お前は顔に汗を流してパンを得る。土に返るときまで。お前がそこから取られた土

に。塵ちりにすぎないお前は塵に返る」(18、19節)と言う。こうして人間は「エデンの園」を追放される。最初の人間がこのように神に背いたことを「原罪」と呼ぶ。

(18) 後藤基巳「馮琦小論 明末容教士人のありかた」(『明清思想とキリスト教』所収)を参照。『馮用韞先生北海集』卷三八に、「為重経術、祛異説、以正人心、以励人材疏」、「為遵奉明旨、開陳条例、以維世教疏」などの上奏文が見える。